

教育のイメージ② 「生きる力」と「スキルアップ」

理事長 片山喜章

来年4月から法人7園のうち、3園が幼保連携型の認定こども園になります。国は4時間のコアタイムを教育時間と銘打っています。では、それ以外の時間は、一体、なんでしょうね？

教育の目標は「生きる力」を育む事であると文部科学省は唱えています。確かに、わが子の将来に思いを寄せると、困難に負けないで力強く生きてほしいと願います。しかし、日本人の多くは、幼児教育とは、抽象的な「生きる力」より、具体的な「知識や技芸」の習得であるとイメージしているようで、国民のコンセンサスは、アイマイなまま、だと実感しています。

私自身の教育観もまた、社会の変化、そして、実践を重ねるほどに変容してきました。

一般に、遊びを通して、自分たちで考え、自分たちで問題解決し、自己主張し合う経験を積み重ねれば「生きる力」は育まれる。なので、知識や技芸的なコトは、後回しで良いとする考え方と、「知識や技芸」を学習・習得する過程で、生きる力も備わってくるという考え方が並走している感があります。今後、「子どもが自分で考えて、話し合っ、物事を決めていく日常」を、一層、豊かにし、園生活のルールづくりにも参画し、子どもも責任も持つ、そんな教育目標は堅持し、それとは別に、技芸のスキルアップ（跳び箱が跳べる、豊かに描画表現する、読み書きができる等）も個々に適切な配慮をしながら、新たな教育目標にしようと画しています。

「@@ができるようにがんばれ！」と子どもに課題を強いるのではなくて「@@ができるようになりたい！」と子ども自身が、自分の願いとして、意識化できるように導き、そして見守る“先生集団の高い技量”が問われます。強いられた事をがんばらせるだけなら、子どもは、時間の経過とともに生きる事自体が苦痛になる可能性があります。昨今、連続した少女の異常な事件の背景には、親の期待に応えようと努めた結果、知識や技能は体得しても“自分不在”で“空虚”が支配していたような、そんな幼少期や学童期の過ごし方が見え隠れします。

前述のように、先生集団には高い指導性が求められますが、その際、第一義的に大切な点は、自由に遊べる環境と時間を保障し、自分で選んだ遊びをして、片付ける習慣です。その経験量が、技芸をはじめ、興味のある事を自己課題化する“基礎エネルギー”になると捉えます。

そして、保育界でいう「導入」のあり方がとても重要です。例えば、描画活動においては、赤、青、黄の三原色を使った色の混ざりと色の変わりを友達とともに不思議に感じる経験量が、作品製作欲につながっていると実感しています。サーキット運動においても、運動量が十分、保障され、多彩な遊具で多様な動きをくり返すからこそ「逆上がりができるようになりたい」という願いが芽生え、先生は、それに応える形で専門的な補助をするという構図です。

「生きる力」と「技芸の獲得」。この2つの教育目標を統合的に実践するには、私たち保育者集団の創造力の発揮、スキルアップが課題になる、と気合いを入れているところです。